

悪徳の支配

『阿呆物語』にみる愚と罪

森下 勇矢

序

人文主義者セバスティアン・ブラント (Sebastian Brant, 1457-1521) の名を広く知らしめた『阿呆船』 (*Das Narrenschiff*, 1494) では、中世宮廷道化の姿に身を包んだ愚者のモチーフが用いられ、人々の愚かさが彼らに投影される形で諷刺されている。この作品で扱われた愚者は、人間が持つ弱さ、あるいは罪を体現した存在として登場する。『阿呆船』の成功はさらに、『ティル・オイレンシュピーゲルの滑稽譚』 (*Ein kurzweilig Lesen von Dill Ulenspiegel*, um1510)、デジデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus, 1466-1536) の『痴愚神礼賛』 (*Stultitiae Laus*, 1511) やトーマス・ムルナー (Thomas Murner, 1475-1537) の『阿呆祓い』 (*Narrenbeschwörung*, 1512) などに代表される「愚者文学 *Narrenliteratur*」の興盛に繋がった。また、「ハンスヴルスト *Hanswurst*」¹をはじめとする道化達が謝肉祭劇の舞台を席卷していたことは、民衆文化に道化・愚者の存在が根強く浸透していたことを示すものである。

愚者特有の性質は、一般に称されるところの「愚者概念 *Narrenidee*」に含まれるが、これは単に人間の認識能力の欠陥や、中世の宮廷や謝肉祭で活躍した道化・愚者の性質のみを指すものではない。ケネカーはブラントの『阿呆船』の愚者を「認識・判断力が曇らされているがゆえに、精神的に道徳上の迷妄の中で行動し、真の目標を見失った無知なる罪びと」²として定義している。ケネカーはさらに、1500年頃の文学作品に見られる愚者を用いた主題設定は、無分別な状態や道徳・宗教的な認識能力不足に関するイメージが、罪によって惹起された人間の欠陥に結び付けられる過程で行われたと論じる。³ 『阿呆船』を皮切りに、文学作品の中で多く用いられることとなった愚者概念は、ハンス・ヤーコプ・クリストッフエル・フォン・グリーンメルスハウゼン (Hans Jacob Christoffel von

¹ 確認可能な資料のうち、「ハンスヴルスト」という語が初めて用いられたのは、1519年に刊行された『阿呆船』の低地ドイツ語版においてである。メツガーによればマルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) はこの語を多用していたようであり、1541年には『ハンスヴルストに対して』 (*Wider Hnaswurst*) という論争文書を著している。ハンスヴルストの表象はイギリス喜劇団やイタリアのコンメディア・デッラルテ (*Commedia dell'arte*) の影響を受けながら、独自の発展を遂げていった。Vgl. Werner Mezger: *Narrenidee und Fastnachtsbrauch Studien zum Fortleben des Mittelalters in der europäischen Festkultur*. Konstanz (Konstanz Universitätsverlag) 1991, S. 207.

² „(.....) der Sünder aus Unwissenheit, der im Zustand geistig sittlicher Verwirrung handelt und nur deshalb das wahre Ziel verfehlt, weil seine Erkenntnis- und Urteilskraft verdunkelt ist.“ Barbara Könniker: *Wesen und Wandlung der Narrenidee im Zeitalter des Humanismus. Brant-Murner-Erasmus*. Stuttgart (Steiner Franz) 1966, S. 85.

³ Vgl. ebd., S. 10.

Grimmelshausen, um 1622-1677) に引き継がれ、『阿呆物語』 (Der Abentheuerliche Simplicissimus Teutsch, 1668) の主人公である愚漢ジンプリチウス・ジンプリチシムス (Simplicius Simplicissimus) として結実する。この特徴的な名前は、「*simplicissimus*」という語が「単純な」という意味を持つラテン語「*simplex*」の最上級形であることから、「大馬鹿者」などの意味合いを持つと考えるのが適切であろう。本研究はこのジンプリチウスに表象される愚者概念に焦点を当てるとともに、彼の愚が悪徳や罪と結びつき、本人の墮落が生じるプロセスを詳らかにしていくものである。⁴ジンプリチウスの愚者概念が持つ多面性に留意しつつ分析を進めるべく、まず彼本人の名前に表れる肯定的な愚の側面について考察を加えておきたい。

1. 単純さ

ジンプリチウスの愚者性に関連して、ヴェルツィヒは 14 世紀の隠者であり、聖人となったパウルス・ジンプレックス (Pauls Simplex) の生涯を紹介し、彼の「単純さ *simplicitas*」⁵の性質がグリーンメルスハウゼンにより引き継がれた可能性を提示している。⁶ジンプレックスの「単純さ」は自身の指導者に対する不自然なほどの「従順 *Gehorsam*」に認められ、その態度はジンプリチウスの隠者に対するものと重なる。後に実の父親であることが明らかとなる隠者は、兵隊の残虐行為から逃げ延びた我が子にジンプリチウスの名を与え、キリスト教の手ほどきを通して彼の信仰の基盤を形成していた。隠者と過酷な衣食住を共にして多くを学び、隠者の死後も彼の教えに従おうとするジンプリチウスの「従順」は、まさに彼が有する「単純さ」によるものであった。

ジンプリチウスの「単純さ」は、先に述べた聖ジンプレックスの特性だけに通ずるに留まらない。『続編』 (*Continuatio*, 1669)⁷の終盤で敬虔な隠者生活を営むジンプリチウスの姿が、聖オヌフリウス (Hl. Onuphrius, um 320-um 400) の伝承上の容姿と見紛うほどであった点や、グリーンメルスハウゼンが隠者のモチーフをヘリベルト・ロスヴァイデ (Heribert Rosweydes, 1569-1629) が編纂した『聖人伝集』 (*Vitae patrum*, 1615) に取材したとするコノパツキの論に鑑みれば、敬虔さを追求する隠者ジンプリチウスの「単純さ」は、

⁴以下で扱う「墮落」という表現について、本論ではこれをジンプリチウスの幼少期特有の純真さや、敬虔さの喪失として扱う。とりわけその宗教的・道徳的な墮落が最も深刻となるのが、後に紹介するジンプリチウスの兵隊時代においてであり、本研究はこの墮落の過程に見られる愚と罪の様相に光を当てる試みである。

⁵「単純さ」の概念は、中世の神学者らによって「純粹」かつ「悪から自由な状態 *frei vom Bösen*」と解釈されていた。Vgl. Werner Welzig: *Beispielhafte Figuren*. Graz / Köln (Hermann Böhlau Nachf.) 1963, S.47.

⁶聖ジンプレックスは、妻の不貞行為をきっかけに、荒地での隠者生活を開始した人物であり、「Simplex」、つまり「単純な者」という名を与えられた。ジンプレックスはすでに隠者生活を送っていた聖アントニウスのもとを訪れ、彼の弟子として受け入れられる。アントニウスの厳しい試験にも耐え、彼から課された命令に忠実に従っていた。Vgl. Welzig (1963), S. 51-52.

⁷通例、『阿呆物語』を構成する5巻分とその『続編』 (*Continuatio*, 1669) は合計で6つの作品に区分されるが、ここでは『続編』を含む『阿呆物語』全体で一つの作品と見なすこととする。

聖者的な信仰への熱心さに換言することができるだろう。⁸しかし、幼少期と隠者としての期間にジンプリチウスを特徴づけていた「単純さ」はそれぞれ同一たりえず、その性質は異なるものである。そのため、本章ではまずジンプリチウスの生涯を俯瞰しつつ、彼の愚者概念の軸である「単純さ」のあり様について見ておきたい。

物心ついた時からすでにジンプリチウスは、自らが「おとう Knan」と呼ぶ代父のもとで羊飼いと暮らしており、神についてはおろか、その「おとう」という人物の名、さらには自分の名まで知らないという、全くの無知蒙昧の状態にあった。そしてある日、略奪を働く騎士達によって彼らの住居は襲われ、女性達は暴行を受け、その狼藉をジンプリチウスは目の当たりにする。女中に促されてその場から辛うじて逃げ去る彼であるが、森を彷徨ったのちに一人の隠者と出会うこととなる。隠者はジンプリチウスの素性を知らうと様々な質問を投げかけるが、彼はどれも十分に答えることができない。そんなジンプリチウスに隠者が初めて「ジンプリチウス」の名を与える。

ああ、恵深き神よ、私はあなたを知ることがいかなる恵と慈しみであることか、さらにはその機会を与えられない者がいかに憐れであるかが分かりました（中略）聞くのだよジンプリチウス（ほかにお前を呼びようがないからな）、主の祈りを唱える時には、こうやって祈るのだよ。

Ach gütiger Gott / nun erkenne ich erst / was vor eine grosse Gnad und Wolthat es ist / wem du deine Erkantnus mittheilest / und wie gar nichts ein Mensch seye / dem du solche nicht gibst (.....) Höre du *Simpli*. (dann anderst kann ich dich nicht nennen) wann du das Vater unser betest / so mustu also sprechen (ST, S. 38.)⁹

ジンプリチウスは徹底的に無知であったが、彼は隠者から多くのことを教えられ、それらをすぐに吸収する力を持っている以上、彼の愚かさを現代ドイツ語で言うところの「töricht」や「dumm」などの語で形容するのは相応しくない。むしろ彼に与えられた「ジンプリチウス」という名に表れているように、彼が罪から離れた純粋な状態にあることを示す「単純さ」を有していると見るべきであろう。そしてこの「単純さ」は、隠者生活の中で隠者に対する「従順」を生み出していたのであり、これによってジンプリチウスは隠者としての厳しい生活を耐ええたのである。しかしながら、ジンプリチウスの愚かさが持つ危険性を認識していた隠者は、自身の臨終にあたって次の三つの訓戒を授ける。まず自らがいかなる人間であるかを認識すること、次に悪い人々には用心すること、そして何に

⁸ Vgl. Ilse-Lore Konopatzki: *Grimmelshausens Legendenvorlagen*. Philologische Studien und Quellen. Heft 28. Hg. von Wolfgang Binder, Hugo Moser, Karl Stackmann, Wolfgang Stammeler. Berlin (Schmidt) 1965, S. 39.

⁹ 作品本文からの引用は、次のテキストから行う。Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen: *Simplicissimus Teutsch*. Hg. von Dieter Breuer. 5. Auflage. Frankfurt/M. (Deutscher Klassiker Verlag im Taschenbuch. Bd. 2) 2018. なお、引用の際には ST と略記し、頁番号を付記する。

も増して「恒心 *constantia*」¹⁰を保つようにというものであり、これらの教えには、教え子の愚かさが持つ否定的側面、つまり無知である故にこの世に溢れた罪の影響を被りやすいことへの憂慮が浮き彫りになっている。その懸念どおり、ジンプリチウスは世俗の世界へと身を移すと墮落の道をたどることになるが、ここで彼が隠者の教えを受けて以降の様子を確認しておく。

隠者の死後に生活の場を世俗へと移したジンプリチウスは、スウェーデン軍にスパイと疑われて捕らえられ、ハーナウ要塞にて司令官のもとで暮らすようになる。この司令官の義理の兄弟である隠者がジンプリチウスの面倒を見ていたことが明らかになり、彼はジンプリチウスを我が子のように育てる意思を見せるものの、ジンプリチウスの失態が続き自分の顔に泥が塗られると、彼から知性を奪い道化者に変えてしまおうと考えるようになる。牧師の助けにより知性を奪われることを免れたジンプリチウスであったが、長いロバの耳の付いた道化服を着せられ、道化として周囲をこき下ろしはじめる。やがてジンプリチウスはクロアチア人に攫われ、彼らのもとから逃げるも、食料を求めて入った農家の家にあるベンチに触れた途端に外へ飛び出し、魔物の舞踏会が開かれている場所へと一瞬で移動してしまう。気絶した彼が意識を取り戻すと、マグデブルクのザクセン選帝侯軍及び皇帝軍の陣営付近におり、そこで彼は書記を務めるヘルツブルーダーの監督のもとで暮らし始める。

ヘルツブルーダーは彼の座を狙う秘書オリバーの奸計にかかり、降格したうえに病に苦しみ、自ら行った占いに出ていた最期の日に殺害される。その後、ヘルツブルーダーの占いによって道化服を脱げば災難が起きると忠告を受けていたにも関わらず、ジンプリチウスは婦人服に着替えたことにより、大尉夫妻や馬丁に激しく言い寄られた挙句、強姦されかけ、結局は再びスパイの疑いで捕らえられて拷問を受けそうになる。しかし彼は幸いにもウィトシュトックの戦いにて、先のヘルツブルーダーの同名の息子によって救出される。このヘルツブルーダーとジンプリチウスは親友の契りを交わすほどの仲であったが、後に親友ヘルツブルーダーは皇帝軍の捕虜になり、ジンプリチウスはヘルツブルーダーが仕えていた隊長に馬番として従事することになる。ところがこの隊長の軍が皇帝軍に制圧されるとジンプリチウスは再び捕虜になり、ゾーストを拠点とする吝嗇な竜騎兵のもとで暮らすことになり、彼とともに「パラダイス」と呼ばれる修道院でご馳走に与る。この竜騎兵が亡くなると、彼の遺産を継承したジンプリチウスは一兵隊となり、上等な緑色の衣

¹⁰ これは新ストア主義の父ユストゥス・リプジウス (Justus Lipsius, 1547-1606) による哲学に由来するものであり、近世において重要視された徳目の一つ。恒常性を尊びつつ困難に対し不変かつ不動であることに重きが置かれる。Vgl. Justus Lipsius: *Von der Beständigkeit* (De constantia). Hg. von Leonard Forster. Stuttgart / Weimar (J. B. Metzler) 1965. Kap. 10. 隠者がジンプリチウスに与えた教えは次のようであった。「愛する息子よ、何よりもまず不動でありなさい。何故ならば終わりの日まで動じない者は救われるのです。もしおまえが私の願いに反して、人間の弱さゆえに倒れるようなことがあっても、正しい悔い改めによって再び立ち上がりなさい。」 „Liebste Sohn / sagte er / vor allen Dingen bleibe standhaftig / dann wer verharret biß ans End / der wird seelig / geschihet aber wider mein Verhoffen / daß du auß menschlicher Schwachheit fällt / so stehe durch ein rechtschaffene Buß geschwind wieder auff.“ (ST, S. 49)

服や鉄砲、さらには馬を購入し、戦いにおいて多くの手柄を立て、功名心をますます高めていき、上等兵にまで昇格する。その頃の彼は、かつて「パラダイス」時代に猟場で狩猟に関するあらゆる知識を身につけたために「獵人 Jägerken」(ST, S. 224)と呼ばれており、敵味方から恐れられる存在となっていた。

以上のように世俗に出たジンプリチウスは、隠者の教えも虚しく、倫理的に墮落した人々との交流を通してかつての「単純さ」を喪失し、悪名轟くならず者へと変貌して行く。隠者の憂慮していた外界の影響を受けやすい点や、本論で詳細に扱う彼の愚者概念の罪の側面がジンプリチウスを敬虔さから引き離していく。数多の狼藉を働いてきたジンプリチウスはしかし、多くの危険にさらされながらも生き延び、世界中を旅して知見を広げ、その間にドイツに平和が訪れて代父のもとで再び読書三昧の生活を営むようになる。そして、彼の生涯の大きな転回地点とも言える「回心」は、ローマの使者がアポロの神殿で受けた神託である「汝自らを知れ *nosce te ipsum*」についてジンプリチウスが思いを巡らせることから始まり、彼は自分の心に以下のように言い聞かせるのであった。

お前の生涯は生涯ではなく、死であり、お前の日々は暗澹たる陰であり、お前の年々は重苦しい夢であり、お前の色欲は甚だしい罪であり、お前の若さは幻想であり、お前の幸福は、目にする前に煙突から飛び去りお前から離れていく錬金術師の宝であるのだ。

(.....) dein Leben ist kein Leben gewesen / sondern ein Todt; deine Tage an ein schwerer Schatten / deine Jahr ein schwerer Traum / deine Wollüst schwerer Sünden / deine Jugend eine Phantasey / und deine Wolfahrt ein Alchemisten Schatz / der zum Schornstein hinauß fährt / und dich verläst / ehe du dich dessen versihest! (ST, S. 543)

この時点からジンプリチウスは自らの罪を認め、それまでに行った悪事の数々を悔やみ始めるが、これは自分自身を識ること、つまり「自己認識 *Selbsterkenntnis*」によるところが大きい。ジンプリチウスの自己認識については後ほど再び扱うが、これは先述の隠者の教えに通じるものであり、ここにきてジンプリチウスは再び隠者に対する「従順」、さらにその源泉とも言える「単純さ」を再び手にしたかのようなのである。この世を捨てて再び隠者として生きることを決意したジンプリチウスだが、過去に送った快樂の日々を思い返し、さらには怠惰に浸って鍛錬を怠り、結局は世俗での生活に逆戻りしてしまう。その後、ジンプリチウスを乗せた船が難破するも、無事に無人島に漂着した彼は、再び隠者としての生活を始めることとなる。彼は怠惰や悪い考えに陥ることのないような様々な工夫をし、極めて熱心に祈り働き、その外見は後に彼を見つけたオランダ人の船長に対し聖者のような印象を与えるほどであった。この段階のジンプリチウスには、もはや宗教倫理的に墮落した様子はなく、今度こそかつての「単純さ」が戻ったかのように見える。

幼少期のジンプリチウスの「単純さ」と最終的に敬虔な隠者として描かれる彼の「単純さ」にはしかし、罪から離れた状態であることを示すなどの一定の共通点が存在している

ものの、それらは同一のものではありえず、両者の間にはジンプリチウスの墮落を境にして大きな差異が生じている。決定的に違うのは無論、ジンプリチウスが生活の中で得てきた豊富な経験・知識であり、これらはすべて無人島での隠者生活に反映されている。そしてさらに彼は、墮落しながらも己の罪深さを認め、悔悟の念を抱くという回心のプロセスを通過しており、先に触れた「自己認識」を経ていることも大きな差異としてあげられよう。その認識は彼が世俗へと生活の場を移し、墮落を経験することで初めて得られる類のものであり、その過程は彼の宗教的な成熟に不可欠であった。そのため、彼にとっての世俗生活は単に否定的な結果をもたらすのみならず、彼が自己を認識する機会を設けるのである。

「自己認識」は本人を「神認識 *Gotteserkenntnis*」¹¹へと至らせ回心させるものであり、加えてグリーンメルスハウゼンは『阿呆物語』の中で、神の恩寵のみによってもたらされる救済など、ルター神学的な救済観について語り手の口を借りて度々言及している。¹² 己の罪や原罪に対する認識とならび、自らの出自に対する認識もまた「自己認識」の一部を構成しているものであり、十字島の隠者となったジンプリチウスが持つ「単純さ」は、幼少期のそれが経験不足からくる知識の無さに負うところが大きいいため脆弱であった一方で、彼自身の深められた神と自己への認識や蓄積された経験に支えられているのである。そして、その「自己認識」のあり方はピカレスク小説の主人公に共通するものであり、ジンプリチウスが回心へと導かれるためには、その認識はまず自身の罪へと向けられねばならない。己の罪深さを認め、悔悟の念を抱くことで初めて、神の恩寵により人間は「神認識」へと至るのである。そして、彼の罪の根源ともいべき愚者性が、ここまで見てきた肯定的な愚「単純さ」と、これに対立する「*stultitia*」および「*ignorantia*」である。

2. *stultitia*¹³と *ignorantia*

¹¹ この「神認識」が人生の最終的な目標地点であるという考えは、近世の「信仰の書 *Erbauungsliteratur*」にて頻繁に見られ、『阿呆物語』の中でも重要な位置を占めている。ここでいう「信仰の書」とは、キリスト教信仰の育成に寄与するような文学作品を指す。Vgl. Dieter Breuer: *Kommentar. In: Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen: Simplicissimus Teutsch. Hg. von Dieter Breuer. 5. Auflage. Frankfurt/M. (Deutscher Klassiker Verlag im Taschenbuch. Bd. 2) 2018, S. 701-1049, hier S. 812.*

¹² ブルッシュは自己認識と神認識の強い結びつきが詩篇 51 篇に由来するというテーゼのもと、その関係性について論じている。Vgl. Jack E. Brush: *Gotteserkenntnis und Selbsterkenntnis Luthers Verständnis des 51. Psalms. Tübingen (J. C. B. Mohr) 1997.* なお、ルター神学の影響を強く受けた救済理解や、作中人物の墮落ないし回心の関わりは、グリーンメルスハウゼンが扱った愚者概念を論じる上で重要なものである。

¹³ ウーレは、「*stultitia*」を現代ドイツ語の「*Torheit*」ではなく、「*Unwissenheit*」に訳出することができるとしている。前者が現在では稀にしか用いられない語であるうえ、語源的にも後者に近いのが主な理由であるが、ギリシア語の訳出において「知 *sapientia*」に対立する語として「*stultitia*」が用いられていることも重要な根拠としてウーレは紹介している。しかしながら、「無知 *ignorantia*」と区分する必要があるため、本研究では「*stultitia*」を「無知」と日本語訳することはせず、あえてラテン語表記のまま用いることとする。Vgl. Tobias Uhle: *Augustin und die Dialektik. Eine Untersuchung der Argumentationsstruktur in den Cassiciacum-Dialogen. Studien und Texte zu Antike und Christentum / Studies and Texts in Antiquity and Christianity 67. Tübingen (Mohr Siebeck) 2012, S. 136.*

シリンガーはジンプリチウスが持つ「単純さ」と対をなす愚を「*stultitia*」とした上で、これら二つの愚がジンプリチウスの中で互いにぶつかりあうと論じている。¹⁴「単純さ」が罪から無垢な状態をもたらす一方で、「*stultitia*」は誤謬への強情な固執であり、よりよき知識に抗する決断であり、頑迷さと眩惑である。」¹⁵ウルガタ訳聖書¹⁶内で最も多く愚を指す語として用いられたこの「*stultitia*」は、これと同様に愚を意味する「*insipiens*」や「*fatuus*」などとともに、「単純さ」に対してのみならず「賢 *wisheit/sapientia*」とも対立関係をなし、ルターによるドイツ語訳聖書の作成に際して「*närrisch*」ないし「*töricht*」へと翻訳されていくものである。¹⁷しかしながら、ここで扱う「*stultitia*」の概念は単なる人間の愚を示すのみならず、罪の傾向を核心部に宿しており、罪に陥る人間の根本要因となる。これに支配された愚者について、メツガーは「賢」と比較しながら以下のように述べる。

暗愚に憑かれた愚者——「*stultitia*」や「*insipiens*」——はこれ（賢者）に対し、精神の盲目さのもと、うつらうつらと時を過ごし、信仰に背き、そして神の恩寵に対する反抗心に駆られ、救済への期待を蔑ろにする人物であった。（括弧内筆者）

Ein törichter Narr dagegen – ein »stultitia« oder »insipiens« – war ein Mensch, der in einem Zustand der Geistesblindheit dahindämmerte, sich vom Glauben abkehrte und in Auflehnung gegen die Gnade Gottes auf die Heilserwartung verzichtete.¹⁸

メツガーがこの箇所 で用いた「精神の盲目さ *Geistesblindheit*」という語は、「*stultitia*」の特徴を良く言い表したものであり、聖俗の両側面において人物の認識を鈍らせ、宗教的・道徳的な規範に反した行動をとらせる要因となる。そして後に続く「神の恵に対する反抗心」という言葉は、「*stultitia*」に起因する神への反抗的な姿勢を示し、その冒濫的態度もまた「*stultitia*」特有の「盲目」によって引き起こされるのである。神に対する敬虔さを失うジンプリチウスもまた、ここで記述される「暗愚に憑かれた愚者」である。その盲目さは、己の罪を認識して回心へと至るために必要となる「自己認識」から本人を遠ざけ、結果的に「神認識」を妨げる。

¹⁴ Vgl. Jean Schillinger: Formen der Narrheit in Cervantes' *Don Quixote*, Sorels *Francion* und Grimmelshausens *Simplicissimus*. In: *Simpliciana. Schriften der Grimmelshausen-Gesellschaft XXIX*. Bern u. a. (Peter Lang) 2007, S. 147-162, hier S. 155.

¹⁵ „Stultitia dagegen ist eigensinniges Beharren auf dem Falschen, Entscheidung wider besseres Wissen, Verbohrtheit und Verblendung.“ Paul Gutzwiller: *Der Narr bei Grimmelshausen*. Basler Studien zur deutschen Sprache und Literatur. Heft 20. Hg. Bern (Francke) 1959, S. 19.

¹⁶ 聖書学者ヒエロニムス (342-420) によって作られたラテン語訳聖書であり、キリスト教思想・教義形成の時期を含む、西欧の長い歴史の中で大きな役割を果たしてきた。カトリックの正典とされたこの聖書を、自国語に翻訳することは異端として扱われる危険を孕んだ。横井秀明: 『聖書の世界』, 自由国民社, 2001, 88-89 頁参照。

¹⁷ Könniker (1966), S. 54.

¹⁸ Mezger (1991), S. 75.

「*stultitia*」に対する否定的な見方は、アダムの墮罪を通して人間が原罪を背負うこととなり、本来の完全さを失うことで生じた、「精神的、道徳的、宗教的能力の決定的弱体化」¹⁹ という意味合いを持つことに由来する。それゆえ「*stultitia*」は特定の人物が持つ欠陥ではなくて、全人類に共通のものであるとされるうえ、原罪のくびきによる弊害は、人間の愚として表出し、これにより全ての者たちは悪へと進む可能性を秘めている。罪から離れた清さを持つジンプリチウスの場合も例外ではなく、彼が墮落を経験する際には無垢な少年の内に潜んでいた「*stultitia*」が「単純さ」に代わって前景化していく。

以上のように、「*stultitia*」はまさにジンプリチウスが罪を犯す元凶ともいえるような働きをするのであるが、彼の墮落はこの愚によってのみ生じるのではなく、「無知 *ignorantia*」²⁰とも深く関わっている。語り手ジンプリチウスは代父と幼い頃の自分によく似た親子のやりとりを目にし、過去の自らの暮らしぶり振り返り、以下のように語る。

(.....) 私は正直でも敬虔でもなかったために、神が私をそうした蒙昧や無知から、より優れた知識や認識へと導いたことに感謝することはなかった (.....)

(.....) ich war doch nicht so ehrlich oder gottselig / daß ich GOtt gedanckt hätte / weil er mich auß solcher Finsternus und Ignoranz gezogen / und zu einer bessern Wissenschaft und Erkantnus gebracht (.....) (ST, S. 336)

タロットはこの箇所では「無知 *Ignoranz*」という語が用いられていることから、「無知 *ignorantia*」がはっきりと表現されていると述べているが、ここでの語り手の発言は代父と暮らした幼少期をふまえてのものであるため、ジンプリチウスの悪徳の原因となる「無知」とは性質が異なるように見える。²¹しかしながら、ブムケの定義に従えば、幼少期であれ神についての知識が欠落していることは「*ignorantia*」の兆候に他ならず、語り手がここで

¹⁹ „(.....) eine entscheidende Schwächung seiner geistigen, sittlichen und religiösen Fähigkeiten“ Könniker (1966), S. 9.

²⁰ 「無知」については、ピエール・アベラルー (Pierre Abélard, 1079-1142) やペトルス・ロンバルドゥス (Petrus Lombardus, 1100-1160) らのもと、「克服可能な無知 *ignorantia vincibilis*」と「克服不可能な無知 *ignorantia invincibilis*」にという二つの定義が生まれ、さらにグラティアン (Gratian, ?-um 1250) によって「自発的な無知 *ignorantia voluntaria*」や「自発的でない無知 *ignorantia involuntaria*」と区分されていく。トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, 1225-1274) はこれらの定義付けを結びつけ、部分的に補完していく。彼にとっては「克服可能な無知」は「自発的な無知」に類似しており、その無知に対して人は有責である一方で、「克服不可能な無知」と「自発的でない無知」に対しては無責である。こうした理解は後世の新スコラ主義に取り入れられ、「*ignorantia*」に対する自発性の程度が大きいくほど、その「*ignorantia*」によって生じる結果への責任は重くなるのである。Vgl: Günter Switek: Art. Ignorantia. In: *Lexikon für Theologie und Kirche*. Bd. 5. Hg. von Walter Kasper, Konrad Baumgartner, Horst Bürkle, Klaus Ganzer, Wilhelm Korff. Freiburg / Basel / Rom / Wien (Herder) 1996, Sp. 411-412.

²¹ Vgl. Rolf Tarot: Nosce te ipsum. Lebenslehre und Lebensweg in Grimmelschhausens "Simplicissimus Teutsch". In: *Daphnis. Zeitschrift für Mittlere Deutsche Literatur und Kultur der Frühen Neuzeit*. Bd. 5. Heft 2. Leiden (Brill) 1976, S. 499-530, S. 518.

用いた「Ignoranz」は罪の性質と結びつく。²² 幼いとはいえ、人間は完全に罪から離れた状態ではありえず、「ignorantia」は「stultitia」と同様に「単純さ」に対立する愚としてジンプリチウスの内にある。これらの否定的な愚はともに、アダムの墮罪以降のあらゆる人間に備わった原罪に由来するものであり、ジンプリチウスを罪へと導くのである。

ハースは「無知」と罪をめぐる中世の神学的な議論を紹介していくなかで、シュテファン・ラングトン (Stephan Langton, 1150-1228) の見解を取り上げつつ、無知と原罪、さらにはこれらによって生じる罪との関係について述べている。ハースによれば、「ignorantia」は原罪や行いによる罪とは同一のものではなく、両者と類似した性質を有しており、さらには原罪と行いによる罪の間の「媒介物 Medium」としての機能を果たす。²³ たとえばタロットは、エギディウス・アルベルティヌス (Aegidius Albertinus, 1560-1620) の『ルシファールの王国と魂狩り』 (Lucifers Königreich und Seelengejaid, 1617) における記述をもとに、「自己についての無知 ignorantia sui」から「傲慢 superbia」が生まれると述べ、ジンプリチウスがゾーストにて名声の高まりとともに「傲慢」に陥っていくことについて言及している。²⁴ カトリックにおける七つの大罪 (罪源) に属するこの「傲慢」については、のちに詳しく扱うが、ジンプリチウスが「傲慢」に駆られて罪を犯すのは、彼が彼自身を知らないという「無知」に支配されているためであり、その根本的原因は本人の原罪にあると考えるべきであろう。

ジンプリチウスが次第に「単純さ」を喪失し、ゾーストの獵人として名声と財産を獲得し、悪漢へと変貌して行くプロセスは、彼の持つ「stultitia」や「ignorantia」によるものであるといえる。「stultitia」によってジンプリチウスの「自己認識」および「神認識」は妨げられ、「自己についての無知」そして「神についての無知 ignorantia dei」へと陥ってしまい、結果的に本論で扱うような「傲慢」をはじめとする罪源・悪徳に支配されるに至るのである。このような過程をたどり、悪に染まったジンプリチウスはしかし、自らの行いを悔い改め、敬虔な道を歩むことを決意する。

父を亡くして世間に出た頃の私は、単純かつ純真であり、実直かつ誠実であり、正直かつ謙虚で、内気かつ節度があり、純潔かつ羞恥心を持ち、信心深く神を恐れていた。しかし、私はたやすく悪意と虚偽に満ち、不誠実かつ傲慢になり、落ち着きがなく、あらゆる場所で神を恐れぬ人間となり、これらの悪を私は誰からも教えられることなく自ら学んだのだ。

²² ブムケは、アウレリウス・アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430) に由来する「無知概念 ignorantia-Begriff」に鑑みながら、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ (Wolfram von Eschenbach, um 1160 - um 1220) の『パルチヴァール』 (Parzival, um 1200) の主人公パルチヴァールの幼年期を特徴付ける「知識の無さ」が、単なる「知らないこと Nichtwissen」とは区別され、不可欠な知識の欠陥、つまり原罪をその起源とする「ignorantia」であると論じている。Vgl. Joachim Bumke: *Die Blutstropfen im Schnee. Über Wahrnehmung und Erkenntnis im »Parzival« Wolframs von Eschenbach*. Tübingen (Niemeyer) 2001, S. 102-103.

²³ Vgl. Alois Haas: *Parzivalsumpheit bei Wolfram von Eschenbach*. Berlin (Erich Schmidt) 1964, S. 268-269.

²⁴ Vgl. Tarot (1976), S. 515

Als ich nach meines Vattern seeligen Todt in diese Welt kam / da war ich ein fältig und rein / aufrecht und redlich / wahrhaftig / demütig / eingezogen / mässig / keusch / schamhaftig / fromm und andächtig; bin aber bald bößhaftig / falsch / verlogen / hoffältig / und unruhig / und überall gantz gottlos worden / welche Laster ich alle ohne einen Lehrmeister gelernet (ST, S. 543-544)

「これらの悪を私は誰からも教えられることなく自ら学んだのだ」という表現についてブロイアーは、『阿呆物語』の周辺作品²⁵である『放浪の女ペテン師クラージェ *Trutz Simplex oder Lebensbeschreibung der Ertzbetrügerin und Landstörtzerin Courasche*』(1669)や『奇妙なシュプリングインスフェルト *Der seltzame Springinsfeld*』(1670)の主人公達との差異化が、語り手ジンプリチウスによって行われていると述べる。²⁶確かにクラージェやシュプリングインスフェルトは他者から悪徳を学んでいるものの、彼らが純粹に他者の影響のみによって悪事を働くという主張は適当ではなく、いずれも自らの意思によって悪へと歩を進めていく。²⁷むしろこの悪に対する自主性という共通点を指摘するべきであって、「悪」を「誰からも教えられることなく自ら学ぶ」という行動には、明らかに罪の傾向を孕む「*stultitia*」の影響が直接的に表れていると見てよい。さらにこの引用箇所では強調されているのは、かつての純真なジンプリチウスの姿と、罪に染まった悪漢としての姿のコントラストであるが、これはそのまま「単純さ」と「*stultitia*」の対称関係に当てはめることが可能である。ここで注意すべきは、「*stultitia*」や「*ignorantia*」のような愚かさのみが墮落の要因となるのではなく、先述の「傲慢」と密接に結びつきながら機能する点である。²⁸

²⁵ 『阿呆物語』の周辺作品は、通例「ジンプリチシムス作品群 *Der Simplicianische Zyklus*」と呼ばれ、ここで挙げる『クラージェ』や『シュプリングインスフェルト』のほか、『不思議な鳥の巣第一部』(*Das wunderbarliche Vogelnest*, 1672)と『不思議な鳥の巣第二部 *Deß wunderbarlichen Vogelnests zweiter Teil*』(1675)がこの作品群に含まれる。

²⁶ Vgl. Breuer (2018), S. 982.

²⁷ ブロイアーはクラージェが、彼女が「母」として慕っていた乳母から悪徳を学び、さらにシュプリングインスフェルトはクラージェとの夫婦生活の中で、彼女とその乳母に悪事を叩き込まれたと説明する。確かにその指摘は正しいのであるが、クラージェが彼女の身を案じた乳母から、男の身振りを教え込まれたのちに騎士に攫われたあと、彼女が再びこの乳母と生活を共にするのは10章になってからであって、すでに悪徳に染まっていたことから、この乳母が彼女に与えた影響はそれほど大きくはない。さらに、シュプリングインスフェルトがクラージェとの結婚当初「羊よりも単純 *einfältiger als ein Schaaf*」(LC, S. 90)であり、彼女のもとを去る際には「狡猾な悪党のよう *als ein Luchs und Kern-Essig seyn mag*」(LC, S. 91)であったという記載があるにせよ、ここで彼の墮落の要因をクラージェと乳母のみに帰するのは誤りであり、本人を罪に引き込む「*stultitia*」が彼女らの教えと呼応し、その墮落が生じたとするのが適当であろう。

²⁸ 以下で中心的に扱う「傲慢」は、「*ignorantia sui*」を原罪との「媒介物」として生じた罪源であると同時に、ジンプリチウスの墮落のプロセスにおいて、「*stultitia*」や「*ignorantia*」と相互作用しつつ彼の行動や心的態度に表出する。そのため、「傲慢」に対して「*ignorantia*」は単なる「媒介物」としての役割を担うのみではありえず、ジンプリチウスが「傲慢」に陥ったのちも、この罪源と彼の否定的愚の関係性については、引き続き留意しておく必要がある。

3. *superbia*

一人称の語り手である老ジンプリチウスは、ゾーストの獵人として墮落を極めていた当時の自分について以下のように述懐する。²⁹

そこで、私はますます飲み食いに明け暮れエピクロス的生活に耽るようになった。なぜならば私は隠者の教えを忘れ、若い私を指導して監督する人物を持たず、私の司令官達も私の持ち帰るご馳走を共に喜び、私を罰し諫めるべき人々が、ますます私をありとあらゆる罪惡へと駆り立てていったのである。こうしたことにより、私はついに神やいかなる惡行も恐れぬ極惡非道の者となったのである。

Darbey fieng ich an / nach und nach mit Fressen und Sauffen ein Epicurisch Leben zu führen / weil ich meines Einsiedlers Lehr vergessen / und niemand hatte / der meine Jugend regierte / oder auff den ich sehen dorffte / dann meine Officier machten selbst mit / wann sie bey mir schmarotzen / und die mich hätten straffen und abmahnen sollen / reizten mich vielmehr zu allen Lastern / davon wurde ich endlich so gottloß und verrucht / daß mir kein Schelmstück / solches zu begehen / zu groß war. (ST, S. 246)

この箇所では述べられていることは、ジンプリチウスが彼の周囲にある人間の影響を強く被りやすく、墮落へと歩む傾向があることに通ずる。その傾向ゆえに、亡き隠者は死の直前にジンプリチウスに対し、墮落した人間に用心するよう忠告を与えるのであるが、次第に彼の「単純さ」は薄れ、かつて必死に従おうとした隠者の教えも忘却されてしまい、「神を恐れぬ gottloß」者となるのである。まさにこの冒瀆的態度が「傲慢」のメルクマールであり、「*stultitia*」を伴って彼を神から遠ざけていく。

周囲の環境に加え、ジンプリチウスの「傲慢」を助長していくのは、彼自身の社会的立場の向上であろう。物語冒頭で幼いジンプリチウスによって歌われる「農民の歌」では、「高慢からお前は自由なのだ」³⁰ という一文が含まれるが、この時の純粋無垢なジンプリ

²⁹ アウグスティヌスの『告白』 (*Confessiones*, 397-401) においてすでに独白形式が用いられていたことから、トラッペンが「ピカレスク小説内での一人称の語り手が必然的に、他の語り方よりも信仰育成を行うのに適している」と論じている。„ (...) eignet sich die Ich-Form des Pikaroromans für die Benutzung dieser erbaulichen Technik naturgemäß weit eher als die andere Erzählverfahren.“ Stefan Trappen: *Grimmelshausen und die menippeische Satire. Eine Studie zu den historischen Voraussetzungen der Prosasatire im Barock*. Studien zur deutschen Literatur. Bd. 132. Tübingen (Max Niemeyer) 1994., S. 318. また、『阿呆物語』が信仰育成の機能を持つのは、ひとえにジンプリチウスの回心物語が中心的な役割を果たすからであり、この点についてもまた、一人称の語り手が従来のピカレスク小説の中で持っていたある特徴が密接に関わってくる。それは、一人称の語り手を担う主人公と彼により描写される自身の姿には時間的差異が存在し、その差異がフロイントが述べるように、主人公の回心によって明瞭化される点である。Vgl. Winfried Freund: *Abenteuer Barock. Kultur im Zeitalter des Barock*. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 2004, S. 222.

³⁰ 該当の詩節は以下のように続く。「高慢からお前は自由なのだ。とりわけこの時代では。そして高慢がお前を支配することのないよう、神はお前にさらなる十字架を与えるのだ。」 „Der Hoffart

チウスと軍人として名を挙げ「傲慢」に陥った彼の対比は、身分差がもたらす影響の大きさを物語る。ゾーストの獵人として恐れられた彼の地位は、「*stultitia*」に囚われて盲目になるのに十分であった。そして、彼の地位の向上は本人が感じる「幸福」の度合いと比例するものであり、これらの高まりとともにジンプリチウスの謙虚さが失われていくのであるが、この点はショルテが論じる通りである。³¹ ジンプリチウスの「傲慢」が彼を取り巻く環境や自身の立場の影響を受けるのは、グリーンメルスハウゼンにとっての「傲慢」を始めとした罪の概念が、人物が身を置く社会構造と密接な関係にあることを示唆している。隠者がジンプリチウスの持つ外界からの影響の受けやすさを案じていたことについてはすでに述べたが、その憂慮は周囲の罪との接触のみならず、社会的境遇が彼にもたらす悪影響にも向けられていたと考えるべきであろう。

ジンプリチウスが味わう幸福な時間は長くは続くことはなく、その終わりは突然に訪れる。パリに赴くこととなったジンプリチウスは、持ち前の容姿の良さゆえ、現地にて「美しいドイツ人」を意味する「ボー・アルマン *Beau Alman*」と呼ばれ、酒池肉林を経験することになる。しかしながら、間もなく彼は病に感染し、所持金も全て奪われたうえに、その病が原因で見るも無惨な姿へと変わり果ててしまう。³² 語り手ジンプリチウスは以下のように述懐する。

そこで私はようやく過去の自分について考え始め、私のかつての繁栄を手助けしたその輝かしい時々を嘆くのであったが、これを私はだらしなく過ごしてきたのであった。私は今になって過去を振り返り、私の戦いにおける並外れた幸運や、見つけ出した財宝は、私の不幸の原因とそのため準備以外の何ものでもなかったことに気づいた。その不幸がかつて、私に偽りの眼差しを向けず、以前のように私を昂らせなければ、私がそれほどまでに遙か下方へと投げ落とされることはなかったであろう。そう、私は私がめぐり会ったかの恵を善と見なしたのであるが、それは悪であって、私をひどい破滅へと導いていったのである (.....)

Da fieng ich erst an hindersich zu gedencken / und die herrliche Gelegenheiten zu bejammern / die mir hiebevorn zu Beförderung meiner Wolfart angestanden / ich aber so liederlich hatte verstreichen

bist du sehr befreyt / Absonderlich zu dieser Zeit / Und daß sie auch nicht sey dein Herr / So gibt dir Gott deß Creutzes mehr“ (ST, S. 25)

³¹ ショルテはジンプリチウスの幸福度と、彼のモラルの反比例的な関係性を論じており、これを元にヴァイトは曲線を用いた図表を作成している。Vgl. Günther Weydt: *Nachahmung und Schöpfung im Barock: Studien um Grimmelshausen*. Bern (Francke) 1968, S. 14-15. なお、ヴァイトが参考にしたショルテの研究は主に以下のテキスト箇所である。Jan Hendrik Scholte: *Der Simplicissimus und sein Dichter. Gesammelte Aufsätze von J. H. Scholte*. Tübingen (Max Niemeyer) 1950, S. 12.

³² ここでジンプリチウスを苦しめる病について、後に紹介するベルゲングリューンの研究に見るように、これが「梅毒 Syphilis」であると断定することは難しい。そのため、ここではあえて「病」として記しておく。なお、本論で扱うベルゲングリューンによる研究については、以下のものを参照した。Vgl. Maximilian Bergengruen: Lässliche Todsünde oder Männerphantasie? Zur Funktion der Luxuria in der Venusberg-Episode des *Simplicissimus*. In: *Simpliciana XXXII*. Bern u. a. (Peter Lang) 2010, S. 83-100.

lassen; Jch sahe erst zurück / und merckte / daß mein *extra ordinari* Glück im Krieg / und mein gefundener Schatz / nichts anders als eine Ursach und Vorbereitung zu meinem Unglück gewesen / welches mich nimmermehr so weit hinunder hätte werffen können / da es mich nit zuvor durch falsche Blick angeschaut / und so hoch erhaben hätte / ja ich fande / daß dasjenige Gute / so mir begegnet / und ich vor gut gehalten / böß gewesen / und mich in das äusserste Verderben geleitet hatte (.....)
(ST, S. 374)

ここにある「Glück」は伝統的なモチーフ「フォルトゥーナの車輪」³³を示し、これを『恒常性について』（*De Constantia*, 1584）の著者であるリプジウスが、同作品内で取り上げつつ修正を加えたものであるとブロイアーは説明する。³⁴ ジンプリチウスの発言から明らかのように、ジンプリチウスの「傲慢」にはフォルトゥーナが深く関わっており、その具体的な働きについては、一人称の語り手による以下の発言の中に記されている。

運命がある者を突き落とそうとする時には、まずその人物を高めへと持ち上げるのであるが、めぐみ深い神は誰かを通して彼が転落することのないように心を込めて警告するのである。私もこの警告を耳にしたが、それを受け入れることはなかったのだ！

Wenn das Glück einen stürzen will / so hebt es ihn zuvor in alle Höhe / und der gütige Gott lasse auch einen jeden vor seinem Fall so treulich warnen. Das widerfuhr mir auch, ich nahms aber nicht an!
(ST, S. 318)

ジンプリチウスの「傲慢」は地位の向上や、彼の感じる「幸福」の度合いと比例していくが、これを司るのは「運命」、つまりフォルトゥーナであって、人物の幸と不幸の変転をなしていく。他者の警告を蔑ろにし、転落へと突き進むその態度には、フォルトゥーナによって高みに持ち上げられたジンプリチウスの「傲慢」が明瞭に表れている。

³³ 「フォルトゥーナ *Fortuna*」はローマ神話（ギリシア神話では「テュケー *Tyche*」として）から運命の女神として伝わる存在であり、伝承の過程でさまざまな図像に描かれてきた。とりわけ中世の図像では、フォルトゥーナは「幸運の車輪 *Glücksrad*」や球体などのアトリビュートとともに描かれた。この車輪の最上部には多くの場合、世俗における現時点での王が乗り、その左側には上方へ登る次期権力者、さらに右側には王位から転落する過去の権力者が描かれる。中世以降、時代の流れとともに車輪が図像に用いられることは稀になっていくが、16世紀にフォルトゥーナが車輪を伴って描かれる場合は、本の挿絵に最も描かれることが多かったようである。Vgl. Wilhelm Drexler: Art. Fottuna. In: *Ausführliches Lexikon der griechischen und römischen Mythologie*. I. 2. *Evander-Hysiris. Sowie Nachträge zu Band I Ablabai-Hysminos*. Hg. von Wilhelm Heinrich Roscher. Hildesheim (Georg Olms) 1965, Sp. 1503-1558, hier Sp. 1503.; Sibylle Appuhn-Radtke: Art. Fortuna. In: *Reallexikon zur deutschen Kunst-Geschichte*. Hg. vom Zentralinstitut für Kunstgeschichte München. Bd. 10. *Flussgott-Futurismus*. München (C. H. Beck) 2021, Sp. 271-402, hier Sp. 338.

³⁴ Vgl. Breuer (2018), S. 918.

ここでさらに、ローアバッハが『阿呆物語』におけるフォルトゥーナないし「幸福」について論じた一節を紹介しておく。

この地上の幸福は充溢のない酩酊であって、紛い物の栄光と輝きなのである。この幸運に盲目に身を委ねる者、自らの命を覆い隠してくださるキリスト教信仰のふところの中で守らない者は、墮落してしまうのである。

Das Glück dieser Erde ist Rausch ohne Erfüllung, ist falscher Glanz und Schein. Wer sich ihm blind hingibt, wer sein Leben nicht im bergenden Schoß des christlichen Glaubens nicht bewahrt, ist verloren.³⁵

「幸福」に酔いしれ、これに身を委ねるその盲目さは、ジンプリチウス自身の愚かさ「*stultitia*」に起因するものである。先に紹介した、メツガーのいうところの「精神の盲目さ」は、ここでもまた「*stultitia*」の中心的な要素として表れるのである。加えて、自らが何者であるのかということに対する彼の「無知」もまた、「傲慢」の生まれる温床となるということについては、前節にて述べた通りである。一時の幸福の中で人間を昂らせる「運命」と、その昂りと呼応しあう「*stultitia*」、そして「傲慢」の根源ともいえる「無知」に囚われることによって、ジンプリチウスは着実に墮落へと歩を進めていく。

4. *luxuria*

ジンプリチウスを墮落へと引き込む悪徳は「傲慢」のみならず多くあるものの、ここで特筆すべきは彼の「色欲 *Wollust / Luxuria*」であろう。この「色欲」もまた七つの大罪に属する罪源であり、ジンプリチウスが罪を犯す原因となる。そして、この罪源が顕著に表れ始めるのが、ジンプリチウスが獵人を名乗っていた時期においてであり、本節ではその表出の仕方と愚や他の罪源との関係について見ていくこととする。

4世紀の教父エヴァグリオス・ポンティコス (Euagrios Pontikos, 345-399) が、女性との関わりや女性に関する想念から生まれる「色欲」を、彼が作成した「罪源目録 *Todsündenkatolog*」に加えて以降、その罪の性質は中世から近世にかけて神学的議論の的となってきた。³⁶そしてさらにポルトが述べるように、絵画の分野においても「色欲」に対

³⁵ Günter Rohrbach: *Figur und Charakter Strukturuntersuchungen an Grimmelshausens Simplicissimus*. Bonner Arbeiten zur deutschen Literatur. Hg. von Benno von Wiese. Bd. 3. Bonn (H. Bouvier u. CO.) 1959, S. 60.

³⁶ ベルゲングリューンによれば、大聖グレゴリウス (Gregor der Große, 540-604) は自身の著作『ヨブ記倫理的解釈』 (*Moralia in Job*, 578-595) のなかで、「傲慢」を他の罪源よりも優先させ、あらゆる罪の根源として認める一方、エヴァグリオスやヨハネス・カシアン (Johannes Cassian, 360-435) は「色欲」を悪徳の根源としてみなし、これを「傲慢」より優先させて罪源目録に加えている。さらにベルゲングリューンは、聖書の第一テモテ 6章 10節にある「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。」もまた、「色欲」がその他の罪源を凌ぎ、罪の根本的な原因としてみなされる根拠として紹介しているが、彼が引用しているラテン語「*cupiditas*」は食欲と情欲のふた通りの解釈が可能であるものの、ギリシア語「フィラルグリア *φιλαργυρία*」は金銭愛を指し、文脈から

する画家の注目度は高く、他の罪源よりも多く主題化される傾向にあった。³⁷のちに『阿呆船』の詩節を取り上げるが、同作品を初めとする諷刺作品の中でも「色欲」は好んで批判の対象とされてきた。グリーンメルスハウゼンの作品においても、女性に対する「色欲」への諷刺は数多く見られ、その中でも以下に見る箇所は罪源と愚の関わりを論じるうえで重要なものである。

獵人ジンプリチウスは、宿の向かいに住む中佐の美しい娘に惹かれ、なんとか自分のものにしようと試みていた。ある日中佐に自宅へと招かれたジンプリチウスは、以後急速に娘に接近することとなる。

この午後から、（そこで私は急いで娘に近づくことはなかったが）再び持ち竿を持って歩きまわり、阿呆の紐を引き始めたのだ（.....）

Von diesem Abend an (da ich mich zwar nur ein wenig bey der Jungfer zutäppisch machte) fieng ich wieder auff ein neues an mit der Leimstangen zu laufen / und am Narrenseil zu ziehen (.....) (ST, S. 326)

シリンガーはこの語り手の発言によって、「傲慢」と同様に「色欲」もまた愚の一つの形式であることが示されていると論じる。³⁸さらにブロイアーは、この箇所にある「阿呆の紐」という表現に関して、『阿呆船』の第十三章「情事について Von buolschafft」に付された木版画との関連を指摘している。³⁹

恋の虜は全くもって盲目で
誰にも知られまいと考える。
これこそ最も強い阿呆薬、
阿呆頭巾がしばらく肌に付く。

Eyn büler würt verblännt so gar /
Er meynt / es näm nyeman sin war /
Diß ist das krefftigst narren krutt
Diß kappen kläbt lang an der hütt
(NS. 13. v. 91-94)

木版画には確かに、愛欲の権限としてもみなされた女神ヴィーナスに、恋に落ち盲目となった者が紐で繋がれているが、実際にグリーンメルスハウゼンがこの木版画から着想を得たかは明らかでない。いずれにせよ、ブラントがこの詩句のなかで強調したのは「色欲」に

いって「金銭欲」ととるべきであろう。加えてベルゲングリューンは、ユリアヌス・ポメリウス (Julianus Pomelius ?-um 500) が『観想的な生活について *De vita contemplativa*』の中で、「傲慢」と「色欲」が同様の起源を持つ罪源であると論じていると述べる。Vgl. Bergengruen (2007), S. 89.

³⁷ Vgl. Ulrich Port: »Augenhuren« Die Bildkünste und die luxuria bei Wilhelm Heinse. In: *Die Sieben Todsünden*. Hg. von Ingo Breuer, Sebastian Goth, Björn Moll und Martin Roussel. Paderborn (Fink) 2014 (=Morphomata; Bd. 27) .

³⁸ Vgl. Schillinger (2007), S. 157.

³⁹ Vgl. Breuer (2018), S. 905.

取り憑かれた者が陥る「盲目」であり、これは「傲慢」の場合と同様に当人を罪へと駆り立てる愚「*stultitia*」によって生じるものである。

ゾーストの獵人として手柄を立て、旗手になることを約束されたジンプリチウスは、日増しに高慢になっていった。それでも本人が「そのころ女性に関心を寄せるまでに至っていなかった *damals noch nichts nach dem Weibervolck fragte*」 (ST, S. 287) と語るように、当時の彼は「傲慢」の影響下にありながらも、依然として「色欲」からは離れていた。そんな彼がこの罪源に接近していくのは、彼がスウェーデン軍の捕虜となって戦いから退き、のらくらと暮らし初め、様々な本を漁るように読み始めてからである。これは、後に再び取り上げる「多くの悪徳の起源である怠惰 *Müssiggang / der ein Ursprung vieles Ubels ist*」 (ST, S. 315) によって生じた行動であり、以下の箇所からもわかる通り、彼の読書は必ずしも肯定的な影響を本人にもたらさなかった。

そのような種類の本を私は可能な限り手に入れ、一冊が手に入るとそれを読み終わるまでは手放さず、昼夜を問わず読み耽った。これらの本は雄弁術よりも騎竿を持って走りまわる術を教えたのだった。⁴⁰

Solcherley Gattungen brachte ich zu wegen wo ich konnte / und wann mir eins zu theil wurde hörte ich nit auff / biß ichs durchgelesen / und sollte ich Tag und Nacht darüber gegessen seyn; diese lemeten mich vor das Wol-reden mit der Leimstangen lauffen. (ST, 315)

こうして先に取り上げた中佐の娘をめぐるエピソードへと繋がっていくのであるが、結局ジンプリチウスは彼女の寝床に入るのに成功したものの、敬虔な彼女は彼の愛撫に応じることはなく、さらにはこの情事が中佐に見つかってしまう。怒り狂った中佐を牧師がなだめ、結局二人は結婚することとなるが、これで彼の「色欲」が収まることはない。

生活の場を妻の元から単身ケルンに移したジンプリチウスは、宿主のもとにいた貴族生まれの二人の学生をパリまで送るも、ある男に馬を売り飛ばされたためにしばらくパリに残ることになる。⁴¹ パリにて医者であるカナルという人物を主人に持つことになり、彼の客の前でリュートと歌を披露しているうちに、ルーヴルにて役者として出演する運びとなる。ジンプリチウスはその美しさに魅了された婦人からヴィーナス山への招待を受け、

⁴⁰ ジンプリチウスがここで読み漁った本は、恋愛本や英雄本の類であって、フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney, 1554-1586) による『アーケイディア』 (Arcadia, 1590) もその中の一つとして挙げられている。この作品は 1638 年にマルティン・オーピッツ (1597-1639) によるドイツ語版が発刊された。また、引用箇所にある「騎竿を持って走りまわる *mit der Leimstangen lauffen*」という表現は、ブロイアーによればもともと鳥を捕まえるために、「鳥もちを塗った小枝 *Leimrute*」を持って歩くことを意味するのであるが、ここでは娘にかまける意味で用いられている。Vgl. ebd., S. 900.

⁴¹ ケルンの商人にジンプリチウスの財産が預けられていたが、この商人は破産したうえに預けられていた財産は全て差し押さえられてしまっていた。これを知ったジンプリチウスは落胆するも、事件解決の日までケルンに逗留することを決めていた。

一週間の間彼を激しく求める合計4人の女性の相手をするようになる。以下は当時のジンプリチウスの心境を表すものである。

私はひそかに最愛の妻を思ったが、それが何になろう、私は残念ながら一人の人間であって、そうした均整の取れた愛らしい女性を見出してしまったのだから、私が貞操を守ってそこから出てくるなどすれば、私は木偶の棒であるに違いなかった。

Jch gedachte zwar heim an meine Liebste / aber was halffs / ich war leider ein Mensch / und fand ein solche wol proportionirte Creatur / und zwar von solcher Lieblichkeit / daß ich wol ein Ploch hätte seyn müssen / wenn ich keusch hätte davon kommen sollen. (ST, S. 369)

ヴィーナス山にてジンプリチウスは最高度に「色欲」に支配されてしまうのであるが、彼の態度は積極的な女性達に対して受動的なままである。持ち前の容姿の良さや楽器や歌の優れた技術は、彼がそうした受動的な態度のままで女性から愛されることを許すのである。こうした彼の美しさや歌声が、ヴィーナス山を降りたのちにジンプリチウスを襲った痘瘡によって失われてしまうと、「色欲」は彼をより積極的に女性へと駆り立てる。金持ち連中と連んで放蕩の限りを尽くしていたジンプリチウスが、親友ヘルツブルーダーの死後に一人で悲しみに暮れていた時、目の前に現れた美女に対して欲情する彼は、幼少期の頃の純粋な彼とは、全くの別人と成り果てている。

ベルゲングリューンは、パリでの舞台やヴィーナス山でのジンプリチウスを支配していた「傲慢」ならびに「色欲」の様相について論じるなかで、これら二つの罪源が教父学上の罪に関する議論内で密接に結びつき、さらにあらゆる罪の根源と見なされてきたことについて説明している。⁴²ベルゲングリューンは、ジンプリチウスがヴィーナス山を降りてパリを去ったあとに発症した「フランス病」の症状について、この病を「フランス病 die liebe Franzosen」(ST, S. 372)とジンプリチウスが表現するところの「梅毒」と断定できないとする。その根拠としてベルゲングリューンは、その病に子供たちも苦しめられており、さらに後にテキスト内で「小児疱瘡 Kinds-Blattern」(ST, S. 373)という語が用いられていることを挙げている。さらに、梅毒が「色欲」に対する神の罰であるという論理を前提としつつ、ベルゲングリューンはジンプリチウスの疱瘡は、「色欲」内部の「傲慢」を神が罰したものであると述べ、この場合「色欲」は「以前の悪徳が——この場合は『傲慢』が——新しい『色欲』の形式に変転ないし変化する場所に過ぎないのである。nur der Ort, wo vorherige Mala – in diesem Falle: die Superbia – in die neue luxurische Form „verkehrt“ oder „verwandelt“ werden。」⁴³と論じている。ベルゲングリューンがパラケルスス(Paracelsus, 1493-1541)の記述を引用しながら述べるように、疱瘡は梅毒のみによる症状でないことは確かであるものの、ジンプリチウスの疱瘡の正体が不確定な状態では、神の罰が果たして「色欲」に

⁴² Vgl. Bergengruen (2007), S. 89.

⁴³ Ebd., S. 94.

対する罰としての梅毒か否かを確定させることは難しい。さらに、たとえ彼の疱瘡が梅毒以外のものであったと仮定しても、これが「色欲」以外の悪徳に対する神の罰であると判断する必要はないであろう。ここで重要となるのはむしろ、「傲慢」と「色欲」の近さであり、これらはともに「*stultitia*」と結びついてジンプリチウスに表出するのである。つまり、ここで扱った二つの罪源は、「*stultitia*」による「盲目」をその拠り所としている。

中世以降、ヴィーナスがその美によって人を誘惑し、罪深い肉欲に満ちた快楽の虜とさせる場所として扱われてきたヴィーナス山のモチーフであるが、グリーンメルスハウゼンは単にこれを『阿呆物語』に取り込んだのみではない。⁴⁴ ヴィーナスが金星を指し、さらにその金星が占星術の領域において持つ、愛や芸術との繋がりや、パリやヴィーナス山のジンプリチウスの行動を考慮すれば、ヴァイトが論じる占星術と作品の関連性は至極妥当であろう。ヴァイトはその研究の中で、「主人公ジンプリチウスは徹頭徹尾、運命の力、惑星の影響下にある。」⁴⁵と述べており、ジンプリチウスに表れる「色欲」は「金星」の影響下にあり、ここでもまた「運命」、フォルトゥーナは彼の罪源が顕著になる要因の一つとして立ち現れる。⁴⁶ここまでの分析から明らかなように、ジンプリチウスの墮落は彼の愚かさやその他の罪源が個々に表出したために生じるのではなく、これらが互いに組み合わせ、さらにフォルトゥーナの影響を受けつつ顕在化していく。このことは、グリーンメルスハウゼンがジンプリチウスの人物造形において織り込んだ、愚者概念の複雑さを物語る。

⁴⁴ ヴィーナス山のモチーフの起源は 14 世紀にまで遡るが、15 世紀のヘルマン・フォン・ザクセンハイム (Hermann von Sachsenheim, um 1366-1458) がこれを新たに持ち上げて以降、文学作品に度々用いられるようになった。ドイツにこの山を置くケースもあったようであるが、ヨハン・フィッシュャルト (Johann Fischart, 1541-1591) は作品内でこの山がイタリアにあるものとして扱っているとブローアーは説明している。Vgl. Breuer (2018), S. 914-915.

⁴⁵ „Der Held Simplicius steht von Anfang an bis Ende unter dem Einfluß der Schicksalsmächte, der Planeten;“ Günther Weydt: Planetensymbolik im barocken Roman. Versuch einer Entschlüsselung des „Simplicissimus Teutsch“. In: *Doitsu Bungaku* 36. Tokyo (Ikubundo) 1966, S. 1-14, S. 14.

⁴⁶ ヴァイトは『阿呆物語』とほぼ同時期に完成された『不断曆』 (Ewigwährenden Kalender, 1670) を取り上げ、そこに記された七つの惑星が占星術において有する性質と物語構成の関わりについて次のような分析を試みている。ヴァイトは『続編』を含めて合計 6 巻からなる『阿呆物語』を区分し、各巻におけるジンプリチウスの置かれた立場やその状態が、「土星 Saturn」、「木星 Jupiter」、「火星 Mars」、「太陽 Sonne」、「水星 Merkur」、「月 Mond」、そして「金星 Venus」の持つ性質と重なると結論づけている。作品全体を占星術を中心とした物語構造に組み込むこの論は、スパーンによる厳しい批判を受けるなど、未だ議論の余地を残している。とはいえ、ヴァイトがパリでのジンプリチウスを描く第三巻中盤から第四巻中盤に当てはめた「金星」の性質については、著者の意図的な働きかけがあった可能性が高い。該当の箇所では性愛のみならず、音楽や芸術などの女神ヴィーナスないし「金星」に属する性質が中心的役割を果たすことなどから、「金星」とヴィーナス山をめぐる物語箇所の繋がりには明らかである。Vgl. Weydt (1966), S. 1-14.; Weydt (1968), S. 243-301.; Blake Lee Sphar: Grimmshausen's „Simplicissimus“: Astrological Structure? *Argenis. Internationale Zeitschrift für Mittlere Deutsche Literatur*. Jahrgang 1. Heft 1-4. Las Vegas (Western University Press) 1977, S. 7-29.

結語

本論では、『阿呆物語』の主人公ジンプリチウスの名前が示す肯定的な愚「単純さ」や、これに対立する否定的愚「*stultitia*」及び「*ignorantia*」、加えて原罪にその起源を持つ後者によって生じる、罪源と罪の様相について見てきた。罪源の中でも今回扱った「傲慢」と「色欲」は、ジンプリチウスの墮落を考えるうえで中心となるものであり、これらが愚と組み合わせりつつ、互いに共鳴しあいながら人物に表出していくのである。その表出を促すのが「運命」であって、その「運命」の絶えぬことのない変転は、ジンプリチウスに隠者が与えた「恒心」の教えを正面から覆し、盲目に支配された彼の「傲慢」をさらに掻き立てていく。このプロセスは、ジンプリチウスの「回心」や「自己認識」におけるそれとのコントラストをなすものであるが、ヴァーグナーは回心のあり方について以下のように述べる。

回心は一度きりの行動ではなく、生涯に渡る実現のプロセスを示すのであり、ある特定の時点に固定されえないのである。回心の経過はそのため、ゆったりとした成長と成熟のプロセスにより特徴づけられているのである。

Da die Bekehrung nicht einen einmaligen Akt, sondern einen lebenslangen Prozeß der Realisierung darstellt, kann sie auch nicht auf einen bestimmten Zeitpunkt fixiert werden. Der Vorgang der Bekehrung ist durch einen allmählichen Wachstums- und Reifungsprozeß gekennzeichnet.⁴⁷

タロットによれば、グリーンメルスハウゼンは登場人物の回心を「一度きりの経験として als ein einmaliges Erlebnis」⁴⁸ではなく、「一つの内的プロセスとして als einen inneren Prozeß」⁴⁹扱っており、ヴァーグナーが考える「回心」と同様のものである。ジンプリチウスが幼少期に持っていた「単純さ」の喪失と、隠者生活の挫折を乗り越え、自己と神に対する認識に至り、最終的に敬虔と知識が備わった「単純さ」へと回帰していく様子は、回心とは対照的な墮落という事象を孕んでいてもなお、彼の生涯全体が一つの回心物語であることを伝えている。そこに描きだされるのはジンプリチウスが持つアンビヴァレントな愚の様相の移行であり、鏡の役割を担うその愚行の数々に投影されるのは、原罪を背負う人間一般の愚の姿に他ならない。この罪と愚の連関こそが、グリーンメルスハウゼンが作品を通して描こうとした人間の負の側面であり、まさにそこに彼は諷刺の矛先をむけるのである。

⁴⁷ Falk Wagner: Art. Bekehrung III. In: *Theologische Realenzyklopädie*. Hg. von Gerhard Krause und Gerhard Müller. Bd. 5. Berlin/ New York (De Gruyter) 1980, S. 469-480, hier S. 475.

⁴⁸ Rolf Tarot: Die Kunst des Erzählens in Grimms Hausens Wunderbarlichem Vogelneest. In: *Simpliciana. Schriften der Grimms Hausens-Gesellschaft XXVIII*. Bern u. a. (Peter Lang) 2006, S. 25-42, hier S. 38.

⁴⁹ Ebd.

Dominierende Laster

Sündhafte Narrheit in Grimmelshausens *Simplicissimus Teutsch*

Yuya MORISHITA

In dem *Abenteuerlichen Simplicissimus Teutsch* (1668) besitzt Simplicius die sogenannte *simplicitas* (Einfältigkeit / Reinheit), die ihm als seine Haupteigenschaft zugeschrieben wird. Der mittelalterlich-theologischen Auffassung zufolge bedeutet einfältig zu sein, dass man rein und frei von Sünden sei (Welzig 1963). Die folgsame gehorsame Gesinnung von Simplicius gegenüber dem Einsiedler, die auch der heilige Paulus Simplex seinem Lehrer, dem heiligen Antonius, entgegenbrachte zeigte, entspringt seiner *simplicitas*. Aber Simplicius erlebt trotz der *simplicitas* und der Lehre des Einsiedlers einen religiös-moralischen Verfall. Nach der Selbsterkenntnis und der Gotteserkenntnis bekehrt er sich, und seine *simplicitas* tritt wieder in den Vordergrund. Diese *simplicitas* ist nicht mehr dieselbe wie in seiner Kindheit, denn sie gründet auf der Selbsterkenntnis, der Gotteserkenntnis und weiteren Erkenntnissen denen, die er im Laufe seines Lebens gewonnen hat.

Der Gegenbegriff zur positiven *simplicitas* ist die *stultitia*, die den Charakter der Sünde hat, und durch diese Narrheit verfällt Simplicius der Verderbnis. Die Ursache dafür ist aber nicht nur die *stultitia*, sondern auch die *ignorantia*, die Unwissenheit; beide haben ihren Ursprung in der Erbsünde. Durch die *ignorantia* als „Medium“ zwischen Erbsünde und Sünde, insbesondere durch die *ignorantia sui*, wird Simplicius in die *superbia* und die anderen Todsünden und Laster verstrickt. Die Sünden und Laster lernt er „ohne einen Lehrmeister“ (ST, S. 544) durch seine *stultitia* kennen und es entsteht der Konflikt zwischen Simplicius' frommen und unfrommen Eigenschaften, der den Gegensatz zwischen *simplicitas* und *ignorantia* widerspiegelt. Simplicius wird als „Jäger von Soest“ sehr erfolgreich und sein gesellschaftliches Ansehen steigt. Je größer sein Glück wird, desto größer wird seine *superbia* und er verliert später durch die Syphilis seine Schönheit und sein Vermögen. Dieser abrupte Absturz ins Unglück ist für Simplicius hervorgerufen durch den Glückswechsel, nämlich infolge der Herrschaft der Göttin *Fortuna*. Aufgrund seiner *stultitia* kann er nicht erkennen, dass sein gesellschaftlicher Status durch *Fortuna* erhöht wird, und er verfällt in Hochmut. Dabei erscheint seine *ignorantia* als *ignorantia sui* und seine Verderbnis wird dadurch vorangetrieben.

Luxuria ist neben der *superbia* eine der wichtigsten Todsünden, die Simplicius stark beeinflussen. Die Beziehung zwischen Blindheit und *luxuria*, die auf dem Holzschnitt im 13. Kapitel des *Narrenschiffs* dargestellt ist, wird durch *stultitia* ausgelöst. Die *luxuria* Simplicius', die zunächst nicht deutlich zu erkennen ist, wird im Romanverlauf sichtbar und steht im Zusammenhang mit der Venusberg-Episode, in der er sich den Frauen gegenüber eher passiv verhält. Aber seine *luxuria* wächst in ihm weiter, trotz des Verlustes seiner Schönheit, und sein früherer reiner Charakter ist in dem Helden nicht mehr erkennbar, der im „Sauerbrunnen“ einer schönen Frau nur aus sexueller Begierde einen Heiratsantrag macht. *Superbia* und *luxuria* verbinden sich mit den lasterhaften Torheiten *stultitia* und *ignorantia*. Diese erscheinen unter dem Einfluss der Venus in der Astrologie und der schicksalsherrschenden *Fortuna* als die religiös-moralische Verderbnis Simplicius'.